

2016年9月4日 礼拝メッセージ

聖書：使徒の働き 2章 25～36節

説教：イエスを十字架につけたのです

あらすじ

かつてまだ聖書の神を知らなかった頃、何か困ったことが起きると、この世の神々に祈ったことがあります。もしかして神は気が向けば、問題を解決してくれるかもしれない。神をそのように考えておりました。聖書の神はどうなのでしょう。今日の箇所から考えていきます。

過越の祭りから五十日が経った五旬節の日、イエスの弟子たちは一つの家に集まっていたときです。天から激しい風が吹いてくるような大きな音がしました。エルサレムの町の人たちはいったい何事が起きたのかと集まって来て見ると、普段は外国語などしゃべったこともない田舎者が、十二カ国語を越える様々な言語を滑らかに語っています。これはどうしたことかと人々がとまどっていたとき、ペテロが他の十一人とともに立って、いま目の前で起きている出来事について説明を始めました。このことは突然前触れもなく起きたのではない。旧約聖書のなかの預言者ヨエルが、神はやがて聖霊を注いでくださるという約束を語っていたのではないか。そのことが今起きたのだ。そして、あなたがたもまだ覚えているはずだが、五十日前イエスが十字架で死んだことと、この出来事とは無関係なのではない。いや、全部つながっていると語り始めます。

1 ダビデの預言

1) ダビデは墓に葬られている

どうつながっているのか。ペテロはダビデ

のことを取り上げて説明します。29節。「兄弟たち。父祖ダビデについては、私はあなたがたに、確信をもって言うことができます。彼は死んで葬られ、その墓は今日まで私たちのところにあります。」

ユダヤ教徒は今でも熱心にダビデの墓にお参りするそうです。ペテロの時代もそうです。ペテロが「私は確信をもって言うことができます」と語っていますが、なんのことはない。「日本には富士山があることを私は確信をもって言うことができます」と語っているのと同じ。誰もが知っている常識からペテロは話を進めていきます。あなたがたはダビデの墓に行くでしょう。何も入っていないかららっぽの墓にお参りに行く人はいません。人々がお参りに行くのは、墓の中になぎながら納められているからですね。

2) 「朽ち果てない」とは誰のことか

まずそのことを確認してから、27節でこう言います。「あなたは私のたましいをハデスに捨て置かず、あなたの聖者の朽ち果てるのをお許しにならないからである。」

これはダビデが書いた詩篇16篇10節からの引用です。誰かが死からよみがえるということを語っています。問題は、いったい誰がよみがえるのか。当時の人々は考えました。ダビデが語ったのだから当然ダビデ自身のことではないか。ところがペテロは、はっきりとその解釈は間違いだと打ち消します。もし彼がよみがえったというのなら、墓の中には何もありません。でも、あなた方はダビ

デの墓にお参りに行っているではないか。言われてみればそのとおりです。ダビデがよみがえったのではない。ではいったい誰がよみがえるのか。

そこでペテロは言うのです。30, 31 節。「彼は預言者でしたから、神が彼の子孫の一人を彼の王位に着かせると誓ったことを言われたことを知っていたのです。それで後のことを予見して、キリストの復活について『彼はハデスに捨てて置かれず、その肉体は朽ち果てない』と語ったのです。」

ダビデは、ダビデの子孫として来られるキリストを指して、キリストは死からよみがえられると、あらかじめ預言していた。そして実際にキリストは死からよみがえられたのだ。ダビデが詩篇で語っていたことが、五十日前に起きた。ペテロはそのことを指摘します。

2 十字架で殺された方がキリストである

1) 手順1：わたしの右の座に着いていなさい

でも疑い深い人は質問するでしょう。「でも、五十日前に十字架で殺された男が、そのキリストであるとどうして言えるのか。私はキリストがよみがえったところを見ていないぞ。どうやって証明するのだ。」

そのとおりです。ペテロはこの疑問に関して二つの手順を踏んで説明します。まず最初の手順。34, 35 節で詩篇 110 篇 1 節を引いていきます。「主は私の主に言われた。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまではわたしの右の座に着いていなさい。」

この文章は、だれかに説明してもらわなければ理解できません。まず、「主は私の主に言われた。」「主」という方が、「自分の主」

に語りかけた。つまり独り言を言ったということか。でも次の文章は、「わたしがあなたの敵を」となっています。これはどう考えても独り言のレベルではない。明らかに二人の人格です。となると最初に出て来る「主」とは誰のことで、次に出て来る「私の主」の「主」とは誰のことか。

ユダヤ教の解釈では、最初の「主」は唯一の神、「私の主」となっているところは「私の主人」のことで、つまり「ダビデ」のことである。そう考えていたようです。でもよく考えたらおかしい。先ほども触れたとおり、ダビデはよみがえっていないのですから、神の右の座にいるわけがない。いまは墓の中です。辻褄が合いません。

じゃあどうするのか。ペテロが答えます。最初に出て来る「主」、それは父なる神のことである。そして二番目に出て来る「私の主」とはキリスト、救い主のことである。キリストがよみがえって神の右に着かれる。ダビデはそう預言した。これがペテロの説明です。

でもまだわからない。使徒たちは「私たちは復活の証人です」と言っているけれど、本当なのか。キリストがよみがえって神の右の座におられるということが、見てもいないのにどうしてわかるのか。

2) 手順2：神の右の座に着き聖霊を受けられた

そこでペテロは手順の二番目として 33 節で語ります。「ですから、神の右の座に上げられたイエスが、御父から約束された聖霊を受けて、今あなたがたが見聞きしているこの聖霊をお注ぎになったのです。」

今、目の前で不思議なことが起きています。田舎者たちが外国語をしゃべっている。この

光景を自分の目ではっきりと見て、聞いている。何が起きているのか誰にも説明できない。しかしこれがもし聖霊の働きによるというのであるなら、どうなるか。旧約聖書の中で預言者ヨエルが語っていました。「終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。」それが今起きたということになります。イエスも天に上げられる直前にこう言われました。「さあ、わたしは、わたしの父の約束してくださったものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高きところから力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」(ルカ 24 章 49 節) そもそも弟子たちが五十日間もエルサレムにとどまっていたのは、イエスのこのことばに従っていたからでした。

私たちは、キリストが本当に神の右の座についておられるのか、目で確認することはできません。でも、確認する方法がひとつある。もし聖霊が注がれているというのであれば、そのことによって主が死からよみがえられ、主が神の右におられることがわかる。そのような方法です。疑い深い私たちのために、主はわざわざこのようなシステムを作ってくれた。そのようにしか思えません。

3 あなたがたはこの方を十字架につけた

1) 罪

ペテロは最後に言います。「すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」

これを聞いて中には、「私は関係ない」と言う者もいたでしょう。しかし 37 節には、「人々はこれを聞いて心を刺された」とあります。みなさんはいかがでしょうか。キリストを十字架につけたのか、つけなかったのか。二千年前のあのゴルゴダの丘に私はいな

かった、と言っても残念ながら無駄です。どの時代だろうが、どこに住んでいようがペテロのことば私たちを追いかけてくる。私たちの心にだれかを憎む思いが潜んでいるなら、誰かをねたむ思いがあるなら、神などいるわけがないと考えているなら、良くない思いをいただいているなら、あなたは主を十字架につけたことになる。だれもこの罪から逃れられない。ペテロはそう言っているのです。

2) 救い

なぜペテロはこんなに厳しいことを言うのでしょうか。彼は偉いのでしょうか。いいえ。ペテロも主を十字架につけたひとりです。イエスのためなら死んでもよいと自信たっぷりだったペテロ。ところが、いざとなれば一目散に逃げてしまう。そんな恥ずかしいことをしたペテロがなぜ人の罪のことを真正面から語れるのか。普通はどうしますか。失敗したこと、悲しいことは思い出さないようにする。触れないようにする。なかったことにする。もしあの時代に写真があったなら、都合の悪い写真は全部焼いてしまう。私ならそうするでしょう。

ところがペテロはそうしない。いつも自分がやったことを自覚しています。なぜか。罪が赦されたことを知っているからです。どうして赦されたとわかるのか。もちろん主ご自身の口から赦しのことばを聞いたということもあるでしょう。でももっと客観的な証拠がある。今人々は見えています。天から聖霊が注がれています。なぜ聖霊が注がれたのか。罪が赦されたからです。聖霊が注がれたという事実を見たとき、ペテロは自分の罪が本当に赦されたことを知りました。

自分のしてきたことを隠して生きるのか。

それとも、それを真正面から見つめながら生きるのか。選択肢は二つあります。隠して生きるしかない。かつて私もそう思っていました。けれども実は深いところで私たちは苦しむことになってしまう。だから神は言われるのです。罪を告白しなさい。光の中にあなたの罪を出しなさい。神はあなたの罪を赦すから安心しなさい。いやそればかりではない。聖霊を与えます。その聖霊が気落ちしてしまうあなたを励まし、試練の中にあっても喜びを与え、暗やみの中にあっても光となって希望を与えるから、聖霊とともに歩みなさい。

ペンテコステの出来事は、神の気まぐれによって突然に起きたのではない。ペテロの時代から千年も昔にすでに神が告げておられた。救いの計画は私たちが気がつくずっと以前から着々と準備されていた。決して気まぐれで動くようなお方ではないことがこれでわかると思います。

救い主を十字架につけて殺した者でさえ、主は愛して下さり、恵みを施そうとされます。恐れずに、安心して、この方に前に自分の罪を告白し続けてまいります。